

視 点 第一線で活躍する家政系出身者から 35

進化するタイル

王尾 亜紀子

はじめに

幼稚園の時にタイルを集めた記憶がある。園の池の工事で剥がされたモザイクタイルだったのだろう。裏庭に積まれた、小さくて色とりどりなかけら達に惹きつけられ、せっせとコレクションしていた。

そして大学時代、友人に誘われ、現在勤めている会社のギャラリーへ建築展を見に来たのだが、階段室にディスプレイされていたデザインタイルの美しさに強い印象を受けたのを覚えている。それが、現在の仕事に就いたきっかけと言えるかもしれない。

はじめの10年間は、ショールームでタイルや住設機器を水回り空間に提案し、コーディネートする業務に携わってきた。その後、店舗・商業施設を担当する建材の営業部門に移り、2年が経とうとしている。

同じタイルでも、店舗と住宅では、要求されるものが思っていた以上に違っていた。永続的なものと、先端的なもの。落ち着いた色彩と、目を引く形状。想像はしていたが、ギャップの大きさに驚いた。商業施設では、機能性や耐久性の基準が他の建築とは異なるケースも多く、使用の自由度が高い分、より質感や色彩と言った、素材そのものの持つ力が問われてくる。

この機会に、タイルの紹介を兼ねて、自分自身でもタイルについて振り返ってみた。あまり、系統立てた説明ではないので、話しのネタ程度に眺めていただければと思う。

タイルとは

一口で言うと、タイルは焼物である。石や粘土を混合してつくった生地を、1,000℃以上の高温で焼成す

る。さらに、デザインや機能性を付加するため、釉薬をかけて焼成するものも多い。釉薬は、ガラス質であるから、風雨や日光、熱や薬品にも強い耐久性がある。こうした特徴により、建築の外装材や歩道の舗装材として、また、浴室・キッチン・トイレ・玄関など、耐水性を求められる部分の化粧材として使われてきた。さらに、焼き物の色合いの美しさを生かした使い方もある。銭湯でタイル絵を眺めたり、ビルのエントランスでモザイク画をご覧になったりしたことがおありだろう。

サイズもさまざまで、小は、1センチ角のかわいらしいモザイクから、大は、畳ほどの大きさまで作ることができる。

焼成には、十数年前までは、長さ100メートルもあるトンネル状の窯が使われていた。窯に入って出てくるまでに2日間もかかっていたのだが、いまは、数時間で焼きあがるコンパクトな、流れ作業的な窯が中心になりつつある。

また、最近では、「焼かない焼き物」として、土が溶けるほど高温にはせず、タイルというよりは、蒸し固めた土といったものも生まれてきている。これは、三和土（たたき）風のタイルとでも言おうか、いつかは土に還る素材である。この他、素焼きタイルの特性を生かし、湿度調整や臭いの吸着効果を持たせた、新しい使い方のタイルもできてきた。

世界のタイル

さて、話は変わって、最古のタイルをご存じだろうか。紀元前3000年ごろのピラミッド地下通路の壁に、タイルが使われている。5×7センチほどの、小さな、目の覚めるようなスカイブルーの釉薬を施したタイルだ。ふっくらと真ん中が盛り上がった形で、張り合わせると葎を編んだような表情が作られる。

施工に対する工夫もされている。裏面の突起には、穴が空けられ、ボタンの裏面に似た形になっている。パピルスの紐を通し、壁の石に結びつけたらしいが、



Akiko OUBI (株) INAX インテリア建材商品部
 著者紹介〔略歴〕奈良女子大学家政学部住居学科卒業。一級建築士、インテリアコーディネーター。〔趣味〕胡弓。〔連絡先〕〒550-0013 大阪市西区新町1-7-1 (勤務先)。



持ち運びの便利さも考えて繋いだのかかもしれない。エジプト時代のタイル研究者もいないのではっきりしたことはわからないが、その分、古代の職人たちがどんな風につくり上げたのか想像するのもおもしろい。

次に古い歴史を持つのは、イスラム世界のタイルである。イスラムの街を歩くと、土色のレンガの町並から、巨大なブルーの葱坊主が突き出ている。乾いた空気の中でモスクのドームが、みずみずしい生命体のような光を放っている。近くで見ると、緻密なアラベスク模様で覆いつくされ、今度はその仕事の細かさに圧倒されてしまう。模様の一色一色が、ひとつのピースになっていて、例えば、蔓草がうねっている模様があるとすると、細い蔓の部分と地色の部分は、別々のピースが張り合わされているのだ。このピースは、単色の陶板から、小さなハンマーで、叩いて作り出される。こうした製法を初めて知った時、日本のそれとのあまりの違いに、ほとんどショックに近いものを感じた。

1000年前の手法が今に残っていて、職人も珍しくはないところに、歴史と環境の違いを感じる。徹底した模様と模様の組み合わせから成る構成も、土色の景色の中でこそびったりと合っている。

イスラム教と共に、スペインへ渡ったタイルは、ヨーロッパの国々へ伝わる中で、それぞれの国において、描かれる題材が変わっていく。市民社会が形成された17世紀オランダでは、庶民の生活を題材にした絵柄が好んで描かれた。子供の遊びが描かれたものなどは遊びの種類までわかって、ほのほのとした気持ちにさせられる。大航海時代を象徴して、帆船のモチーフも多いが、これらタイルの色彩は彼らが東洋から運んできた焼き物に似たブルー&ホワイトである。

今話題の画家フェルメールの絵にもタイルがたくさん描かれていて、市民の住まいでの使われ方を見ることができるので、いちどチェックしてみたい。

日本のタイルの歴史

一方、タイルが日本に伝わってきたのは、6世紀、百済からといわれている。瓦の技術を応用して、敷瓦や腰瓦として寺院建築に使われた。

釉薬をかけて彩色した陶板が現れるのは、鎌倉・桃山時代からだが、建築材料というより、茶道具に見立てられたり、鑑賞用として焼かれることも多かったようだ。

江戸時代の終わりごろから、現在のデザインタイルにつながるような装飾タイルが瀬戸を中心に作られ始め、一般の住宅にも徐々に取り入れられていった。「腰瓦」「化粧煉瓦」など製造元によって様々だった呼び名が、現在の「タイル」に統一されたのは、大正時代も終わりごろということである。

煙草屋の店先に、「こ」「ば」「た」とレリーフタイルがはめ込まれているのを、見かけられたことがあると思う。これも、イギリスのヴィクトリアンタイルを真似たものだ。

タイルは消えていく？

内装用のデザインタイルと建築用の外装タイルを同列に説明するのは少し無理があるのだが、日本でのタイルは、もっぱら「舶来品」をお手本に、目新しい素材として扱われてきたようだ。現在でもイタリアタイルを参考にしたデザインが多くみられる。

ここ最近、住まいや住まい方の変化によって、タイルの使われ方は再び変わってきた。洋風便器の普及で、床に水を流して清掃することは少なくなった。また、タイル張りが多かった浴室やキッチンも、ユニットバスやキッチンパネルなど、新しい建材・設備が登場して素材の選択肢が増えた。銭湯に至っては、さて、最後に利用したのはいつだろう、という方も多いはずである。

デザインにおいても、使い方においても、タイルに関して日本的なるものは、確立途上にあるのだろうか。それとも、うかうかしていると、タイルは消えていってしまうのだろうか。すこし大袈裟な表現でお恥ずかしいが、日本人の心にびたつとはまるタイルへさらなる進化をとげるには、まず焼物としてのタイルをより深く、たくさんの方に知ってもらって、タイルを身近に親しめる素材にしたいと思っている。そこから次の機能や使い方が生まれてくるかもしれない。